

平成 27 年度事業報告書

東京都目黒区下目黒4丁目1番1号

公益財団法人 目黒寄生虫館

はじめに

公益財団法人は民による公益の増進を使命とするものであり、目黒寄生虫館も寄生虫学の研究と啓発に寄与すべく、各種の事業活動を実施している。当年度の経済情勢は大幅な円安傾向が続いたため、基本財産の運用収益は一時的に増収となった。その結果、理事会で可決承認された補正収支予算書に則り、研究環境や館内設備の改善、事業の充実を図ることが可能となった。当年度に実施された各事業について以下の通り報告する。

研究等事業（定款第4条第1号事業）

当法人の研究等事業では、寄生虫の分類学および形態学を主体として日本寄生虫学会をはじめ諸学会において研究報告・論文発表等を行っている。期中には研究員を1名採用し、遺伝子実験に係る備品類など研究環境も新たに整備した。職員の増員により、研究活動はさらに活性化している。学術資料の収集やデータベース化も着実に進めており、現在のもとより、今後の研究活動にも大きく貢献するものとなっている。また、旧法人時より目黒区教育委員会の委託を受け実施している区内の学校等の砂場やその周辺の寄生虫卵調査は、地域に根差した社会貢献活動といえる。その他、研究成果や知識を基盤として他機関や広く一般に向けて助言・指導などを行うなど、多様な観点から専門性の高い事業活動を展開している。

I. 寄生虫学に関する研究・調査活動

1. 寄生虫学に関する研究

A. 論文

1. 小川和夫

- 1) Yokoyama, H. and K. Ogawa (2015): The resurrection of *Myxobolus toyamai* with a validation of a stunted polar capsule based on morphological evidence. *Parasitology International*, 64 (4), 43-47.

コイに寄生する粘液胞子虫 *Myxobolus toyamai* の2つの極嚢のうち、きわめて小型の極嚢も機能することを示し、本種は *Thelohanellus* ではなく、原記載通り *Myxobolus* に属することを明らかにした。

- 2) Ogawa, K., M. Iwashita, C. J. Hayward and A. Kurashima (2015): Three new species of *Pseudodactylogyryrus* (Monogenea: Pseudodactylogyridae) from Australian eels. *Folia Parasitologica*, 10.14411/fp.2015.046

2種のオーストラリア産ウナギに寄生する3種の *Pseudodactylogyryrus* 属単生類の新種を記載した。

- 3) Shimazu, T., K. Kobayashi, K. Tojo, V. V. Besprozvannykh and K. Ogawa (2015): *Paradiplozoon skrjabini* (Monogenea, Diplozoidae), an ectoparasite on the gills of freshwater fishes (Cyprinidae, Leuciscinae) of Japan and Primorsky Region, Russia: a morphological and molecular study. *Bulletin of National Museum of Natural Science, Series A*, 41 (3), 137-154.

極東と日本のウグイ亜科の魚の鰓に寄生するフタゴムシ類を *Paradiplozoon skrjabini* と同定し、記載した。

- 4) Sugihara, Y. T. Yamada, K. Ogawa, F. Yokoyama, K. Matsukura and K. Kanai (2015): Occurrence of the bluefin tuna blood fluke *Cardicola opisthorchis* in the intermediate host *Terebella* sp. *Fish Pathology*, 50 (3), 105-111.

中間宿主であるフサゴカイの一種 *Terebella* sp. におけるクロマグロの住血吸虫 *Cardicola opisthorchis* の季節変化を記述した。

- 5) Ogawa, K., K. Akiyama and D. Grabner (2015): *Paradeontacylix buri* n. sp. (Trematoda: Aporocotylidae) from *Seriola quinqueradiata* cultured in Japan. *Fish Pathology*, 50 (4), 183-191.

養殖ブリとヒラマサ寄生の住血吸虫をそれぞれ新種 *Paradeontacylix buri* および *Paradeontacylix* sp. として記載した。

- 6) Yokoyama, H., N. Itoh and K. Ogawa (2015): Fish and shellfish diseases caused by marine protists. In: “World of marine protists: diversity and dynamics” (ed. by S. Ohtsuka, T. Suzuki, T. Horiguchi, N. Suzuki and F. Not). Chapter 22, Springer, Tokyo, pp.533-549.

海産の魚類と貝類に寄生する原虫について総説にまとめた。

- 7) Tamaru, C. S., R.-E. C. Klinger-Bowen, K. Ogawa, T. Iwaki, A. Kurashima and N. Itoh (2016): Prevalence and species identity of Trypanorhyncha in cultured and wild amberjack, *Seriola* spp. in Hawai'i – Implications for aquaculture. *Journal of the World Aquaculture Society*, 47 (1), 42-50.

ハワイの天然カンパチとヒレナガカンパチの筋肉に寄生する四吻目条虫幼生を *Protogrillotia zerbiae* と同定し、記載した。また、天然カンパチには寄生が多いのに対し、養殖カンパチには寄生が見られないことを明らかにした。

- 8) Shirakashi, S., K. Tani, K. Ishimarua S.-P. Shin, T. Honryo, H. Uchida and K. Ogawa (2016): Discovery of intermediate hosts for two species of blood flukes *Cardicola orientalis* and *Cardicola forsteri* (Trematoda: Aporocotylidae) infecting Pacific bluefin tuna in Japan. *Parasitology International*, 65 (2), 128-136.

養殖クロマグロに寄生する2種の住血吸虫の中間宿主を明らかにした。

- 9) Sommerville, C., R. Endris, T.A. Bell, K. Ogawa, K. Buchmann and D. Sweeney (2015): World association for the advancement of veterinary parasitology (WAAVP) guideline for testing the efficacy of ectoparasiticides for fish. *Veterinary Parasitology*, 219, 84-99.

魚の外部寄生虫駆除薬を試験する際の指針を総説にまとめた。

2. 巖城 隆

- 1) Lavikainen, A., Iwaki, T., Haukisalme, V., Konyaev, S.V., Casiraghi, M., Dokuchaev, N.E., Galimberti, A., Halajian, A., Henttonen, H., Ichikawa-Seki, M., Itagaki, T., Krivopalov, A.V., Meri, S., Morand, S., Näreaho, A., Olsson, G.E., Ribas, A., Terefe, Y., Nakao, M. (2016): Reappraisal of *Hydatigera taeniaeformis* (Batsch, 1786) (Cestoda: Taeniidae) sensu lato with description of *Hydatigera kamiyai* n. sp. *International Journal for Parasitology*, 46(5-6):361-374.

遺伝子解析により、猫条虫 *Hydatigera taeniaeformis* が形態的に判別困難な3種から成る複

合種であることを明らかにし、そのうち主にユーラシア大陸北部に分布し、ハタネズミ亜科の齧歯類を中間宿主とする種を *H. kamiyai* として新種記載した。

- 2) Tamaru, C. S., R.-E. C. Klinger-Bowen, K. Ogawa, T. Iwaki, A. Kurashima and N. Itoh (2016): Prevalence and species identity of Trypanorhyncha in cultured and wild amberjack, *Seriola* spp. in Hawai'i – Implications for aquaculture. *Journal of the World Aquaculture Society*, 47 (1), 42-50.

前ページ7)の論文の共著のため概要は省略。

B. 学会発表

1. 小川和夫

- 1) Ogawa, K., H. Yokoyama and S. Shirakashi: The life cycle of *Cardicola orientalis* (Digenena: Aporocotylidae), a blood fluke of Pacific bluefin tuna.
第9回魚類寄生虫に関する国際シンポジウム、バレンシア、平成27年9月。
クロマグロの住血吸虫 *Cardicola orientalis* の中間宿主内のセルカリアの形態と寄生の季節性について口頭発表した。
- 2) Shirakashi, S., C. Hirano and K. Ogawa: Reproduction and infectious biology of capsalid Monogenea *Neobenedenia girellae*.
第9回魚類寄生虫に関する国際シンポジウム、バレンシア、平成27年9月。
海産養殖魚に寄生する単生類 *Neobenedenia girellae* の生殖行動と産卵・ふ化・宿主への寄生様式についてポスター発表した。
- 3) 石丸克也・白樫 正・小川和夫・久保埜和成・小田憲司:クロマグロの住血吸虫 (*Cardicola opisthorchis*) に対するプラジクアンテルの臨床試験。
平成27年度日本魚病学会春季大会、東京、平成28年3月。
プラジクアンテル(PQ)の50%製剤を用いて、養殖クロマグロにおける PQ の有効性及び安全性に関する実験結果を口頭発表した。
- 4) 小川和夫: ビワヨシノボリに寄生していた新属新種の単生類。
平成27年度日本寄生虫学会大会、宮崎、平成28年3月。
ハゼ科魚ビワヨシノボリの鰓に寄生していた新属新種の単生類について口頭発表した。

2. 巖城 隆

- 1) Lavikainen, A., Iwaki, T., Nakao, M., Konyaev, S.V.: Genetic diversity of the cryptic *Hydatigera taeniaeformis* complex.
第5回地域間会議「シベリアと極東の寄生虫学研究」、ノボシビルスク、平成27年9月。
世界各地の猫条虫 *Hydatigera taeniaeformis* の遺伝子解析により、この種が隠蔽種を含む複合種であることについて口頭発表した。

3. 脇 司

- 1) Waki, T., Lee, J.Y., Cho, Y.G., Choi, K.S.: Increase in *Perkinsus olseni* infection in Manila clams *Ruditapes phillipinarum* transplanted from low to higher infection area on the west coast of Korea.
AQUACULTURE 2016、ラスベガス、平成28年2月。

アサリに寄生する原虫 *Perkiinsus olseni* の水平伝搬実験について口頭発表した。

C. 研究助成

1. (独)日本学術振興会 科学研究費補助金 平成25～27年度 基盤研究(B)

「クロマグロ種苗生産過程で発生する寄生虫病の制御」

研究代表者(小川和夫)

種苗生産過程で問題となる粘液胞子虫 *Kudoa* と住血吸虫 *Cardicola* spp.に関し、以下の結果を得た。陸上飼育中のクドア防除法について、ヒラマサー*Kudoa yasunagai* をモデルとして試験した結果、飼育用水の紫外線処理が防除に有効であることがわかり、感染体の不活化に必要な最低有効照射量は15mJ/cm²であることが明らかとなった。A 県の2地点に沖出したクロマグロ人工種苗を定期的に調査した結果、もう一種の脳クドア(*Kudoa prunusi*)と心臓クドア(*K. shiomitsui*)では地点間で寄生率に違いが見られた。筋肉クドア(*K. hexapunctata*)は他よりも遅れて検出され始めたが、翌年の1月には100%となった。しかし、いずれも魚の成長に伴って自然治癒することが示唆された。住血吸虫については、フサゴカイ類 *Neoamphitrite vigintipes* から得た *C. forsteri* および *Terebella* sp.から得た *C. opisthorchis* のスポロシストとセルカリアの詳細な形態を記載した。これにより、クロマグロに寄生する3種の住血吸虫のフサゴカイ内の発育ステージをすべて記載することができた。また、マグロ養殖生簀のロープやフロート等から毎月定期的にフサゴカイ類を採取した結果、*C. orientalis* の中間宿主であるフタエラフサゴカイは7月に寄生率18.8%に達し、水深4m 付近までゴカイ数、寄生率共に高かった。感染ゴカイ1個体で最大ほぼ1万個のスポロシストを有していた。

2. (独)日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 平成25～27年度 基盤研究(C)

「ハダムシ被害軽減のための新しい防除技術の開発」

研究代表者 白樫 正 [近畿大学水産研究所] - 研究分担者(小川和夫)

新たに確立した *Neobenedenia girellae* 特異リアルタイム PCR で養殖場の海水中におけるふ化幼生の分布を調べた結果、遮光生簀内のふ化幼生密度は非遮光生簀の半分以下であることが示された。生簀網防汚剤による虫卵への影響を調べたところ、ふ化率の若干の低下が見られたものの、寄生を軽減するほどの効果は認められなかった。九州四国の養殖業者に対して遮光生簀や沈下式生簀の実用性についてヒヤリングを行った結果、被害軽減効果は認められるものの、飼育作業が煩雑化する等の問題点も明らかとなった。

3. (独)日本学術振興会 科学研究費補助金 平成27～30年度 基盤研究(B)

「日米医学協力計画(1965-90年)と JICA によるフィリピンへの医療援助」

研究代表者 飯島 渉 [青山学院大学文学部] - 研究分担者(小川和夫)

新潟大学・琉球大学の寄生虫学教室資料である「大鶴正満資料」を目黒寄生虫館に移管し、昨年度に引き続き、アーカイブズ学的な視点による保存措置、公開に向けての概要調査等を行った。

D. 書籍

1. 小川和夫・巖城 隆

「食品安全検定テキスト 初級」第4章 飲食により健康危害をもたらすもの. 4-3 寄生虫. (食品安全検定協会 編), pp.88-93. (中央法規出版、2015)

2. 日本の野生脊椎動物の寄生虫相データの収集・整理

標記についてデータの収集・公開を継続している。データベース「日本産哺乳類の寄生蠕虫類リスト」「鳥類の寄生蠕虫類リスト」の全収録数は平成28年3月末時点でそれぞれ4,033件、2,053件で、昨年度から増加はない。

3. 目黒区内の砂場における寄生虫卵調査

目黒区教育委員会の委託により行われている調査で、当年度は目黒区立の5小学校が対象であった。平成27年8月6日と平成28年2月9日の2回、各校の砂場とその周辺から砂を採取し、寄生虫卵の有無を調査した。今回の調査では、夏季・冬季とも砂場内側および周囲の砂から寄生虫卵と考えられるものは検出されなかったが、校庭周囲の猫の糞便から寄生虫卵が検出された。日常的に子供たちが利用する砂場や校庭周囲に小動物の糞便が発見されたことから、これによる汚染についての注意や手洗い励行などの留意事項を報告書にまとめ、教育委員会へ提出した。(小川和夫、巖城 隆、脇 司)

II. 学術資料の収集および管理

1. 学術標本の収集・整理・閲覧・貸出

当法人が所蔵する寄生虫・宿主標本は現在約60,000点である。職員が研究・展示のため収集した標本に加え、外部研究者からの寄贈標本の整理・データベース登録を継続中である。

当年度の標本寄贈は10件4,567点(うち福岡大学の波部重久先生より4,411点)であった。

外部研究者への標本貸出は2件7点で、その他、来館した研究者の標本閲覧は3件であった。また、他の博物館の展示協力として2件10点の標本貸出を行った。

当法人が所蔵・登録している寄生虫タイプ標本は平成28年3月時点で1,212種4,016点にのぼり、当年度には4種25点が追加された。「目黒寄生虫館所蔵タイプ標本一覧」として、これらの詳細は公式ウェブサイトで公開している。

2. 学術資料の収集・整理・貸出

当法人では標本資料以外の図書・逐次刊行物、その他の資料についても収集し、書庫および文献室に保管している。これらは博物館資料としてデータベース登録して学術資料の拡充を図っている。当年度の資料の閲覧・貸出は7件220点であった。

A. 図書・逐次刊行物

購入または寄贈により、当年度に47冊の図書を新たに登録した。蔵書数は平成28年3月末時点で5,047冊となった。登録した図書の一例を以下に示す。

顧みられない熱帯病：グローバルヘルスへの挑戦（東京大学出版会、2015）

感染症の生態学（共立出版、2016）

衛生動物学の進歩；第2集（佐々学生誕100年実行委員会、2016）

Foodborne Parasites in the Food Supply Web（Woodhead Publishing、2015）

Parasitology：A Conceptual Approach（Garland Science、2015）

一方、逐次刊行物も寄贈を受けるか会員購読するなどして約300種類11,000冊を所蔵している。この

中には過去に休刊となったものや購読をとりやめた種類も含まれる。当年度は研究機関・学術団体35機関、博物館等30施設の刊行物を新たに登録した。登録した刊行物の一例を以下に示す。

The Journal of Parasitology (American Society of Parasitologists) Vol.101 No. 1- No. 6

魚病研究 (日本魚病学会) Vol.50 No. 1- No. 4

日本野生動物医学会雑誌 (日本野生動物医学会) Vol.20 No.1 - No. 4

病原微生物検出情報月報 (国立感染症研究所) No. 422 - No. 433

予防医学ジャーナル (予防医学事業中央会) No. 482 - No. 487

B. 論文別刷等の整理と電子情報化

文献室に保管する論文別刷のデータベース化は当年度でほぼ完了し、新規寄贈文献の登録を継続中である。当年度の新規データベース登録数は1,634件で、平成28年3月末時点のデータベース総収録数は42,934件であった。

C. その他資料の整理

地下書庫に保管されている山口左伸博士に関する資料については、平成25年から青山学院大学の協力により改めて整理を始め、中性紙保存箱への移し替えや目録作成が行われている。当年度は論文に使用された原図を論文毎にまとめ、スキャナーで電子情報化した。その原図および画像ファイルの一部は博物館展示室2階の常設展示に用いられている。

Ⅲ. 寄生虫に関する助言および指導、外部研究者との連携協力

博物館来館者からの質問は32件、電話・FAX・Eメールで受けた質問はそれぞれ52件、6件および1件であった。昨年度の質問件数(それぞれ89件、38件、6件および0件)と比較すると、来館者からの質問が大きく減っていたが、これは職員や学芸員実習生がミュージアムショップに滞在していた時間が減ったことによるものと推測された。

企業から依頼された寄生虫・異物同定は1件であった。

そのほか、大学の卒業論文(1件、東海大学)・修士論文(1件、近畿大学)の作成に関して、指導・助言を行った。また、外国人研究者(Wanlop Pakdee 氏、タイ)に対して標本作製・観察・同定に関する指導・助言を行った(1件)。

普及啓発事業 (定款第4条第2号事業)

当法人の所有する建物は1階と2階に常設展示室を設けている。設立以来無料開館を継続しているが、来館者からの寄付は運営の貴重な一助となっている。当年度は320万円を超える寄付が来館者から寄せられた。その他団体からの一般寄付金を加えると364万円にのぼり、多くの方から事業活動への理解が得られているといえる。常設展示のほかにも特別展示や講演会の実施、刊行物の製作など多岐に渡る事業が展開されており、広く一般に向けた寄生虫学の普及啓発活動を展開し、知識と理解の増進に寄与している。

I. 「目黒寄生虫館」の管理運営事業

1. 開館日数および来館者数

平成27年度の開館日数は306日であった。来館者数は約54,570名であり、1日あたり約178名となる(昨年度より11%減少)。

そのうち、団体・グループ来館者数は2,599名であった。これは昨年度とほぼ同数で、全体の4.7%にあたる。事前の申し込みがなく突如訪れる団体には人数を記入してもらい、実態の把握に努めている。

来館者層は様々である。授業の一環で訪れる学生、家族連れ、中高年グループなど幅広い。近年では外国人来館者も目立つ傾向にあるが、来館者層の比率の正確な把握には至っていない。

2. 常設展示の更新・追加

展示室2階の一室には当法人に山口左伸博士から寄贈された資料が展示されている。これまで一般公開されてこなかった、博士の論文で使用された数々の原図や執筆原稿などの資料にも関心を寄せてもらうためコーナーの拡充を図った。部屋の間口の拡張工事を行い、入口には「孤高の寄生虫学者 山口左伸」という新規のパネルを取り付けた。壁面にはポスターフレームで論文原図を展示し、それらの原図をタッチパネルディスプレイで細部まで拡大して見られる展示システムを新たに構築した。平成28年3月31日に、構築物の取り付け工事を完了し、常設展示として一般公開を始めた。今後も、展示内容を随時更新しながら、博士の功績を伝えていく。なお、本展示の製作は(一財)全国科学博物館振興財団 平成27年度科学系博物館活動等助成事業の助成(43万円)を受けたものである。

また、北里大学特別荣誉教授の大村智博士が平成27年度のノーベル医学生理学賞を受賞したことから、関連する寄生虫の展示標本には新たに解説プレートを加えた。その他にも液浸標本を観察しやすいものに交換したり、解説プレートに英文解説を加えたりと、細部に修正を加えながらよりよい展示を目指している。

3. 展示室の環境整備

劣化が目立った展示室の床材を張り替え、エントランスも自動ドア化の工事を行うなど、良好な展示室を保つよう修繕を順次行って環境の整備に努めた。また、中には1階トイレ前に AED(自動体外式除細動器)を設置した。来館者に万が一の事態が発生したときにも直ちに対応できるよう、展示室の環境整備を進めている。

4. 取材対応

当年度の取材申請は60件で、このうち38件について受け付けた。内訳はテレビ4件、ラジオ3件、新聞7件、ウェブサイト8件、書籍・雑誌類16件であった。申請件数は例年並であるのに対して、受け付けた件数は比較的多い。中でも当年度は、「蟻虫検査が学校の健康診断の項目から廃止されること」に関する質問や、「特別展示・市民講座の紹介」といった依頼が目立った。また、申請のうち11件は海外メディアないし訪日外国人向けの媒体であり、そのうち5件について受け付けた。

II. 教育普及活動事業

1. 特別展示など

A. 特別展示 (1)

平成27年5月2日から9月27日まで「今年も蚊にご用心！」を開催した。一昨年のデング熱騒動を受け

て、蚊に対する正しい知識と理解を深めるため、時事的にも重要なテーマであった。パネルではウイルスや寄生虫を運んで深刻な被害をもたらす代表的な5種の蚊や、気候変動が蚊の媒介する感染症の伝播に与える影響について解説した。蚊の標本や動画を展示したほか、定期的に生きた蚊の提供を受けて生体展示に供した。なお本展示は、東京慈恵会医科大学熱帯医学講座の嘉糠洋陸教授による監修、および生きた蚊の提供を受けた。

B. 特別展示 (2)

平成27年6月12日から「緊急！実物展示 生きているロイコクロリジウム」を開催した。5月末に沖縄県で採集されたオカモノアラガイに寄生するロイコクロリジウムの幼虫を、展示室2階で公開した。当初の事業計画にはなく、前項の特別展示とも同時進行となったが、生きた寄生虫を観察できる貴重な機会となり、来館者の反響も大きかった。幼虫が寄生した5匹のオカモノアラガイを定期的に交換しながら約1カ月半展示を続け、貝への負担を考慮して7月26日に展示を終了した。この展示には沖縄の長嶺純氏の協力を得た。

C. 写真展

平成27年10月24日より、写真展「ダイバーがとらえた寄生虫たち2」を開催した。写真愛好家のダイバーが海中で撮影した水生生物の寄生虫写真の展覧会で、昨年度開催し好評を得た写真展の第2回となる。1階の特別展示スペースだけでなく、2階の一角を有効に活用することで昨年度より展示枚数を増やし、さらに解説プレートを加えることにより、写真への理解を高める工夫が凝らされた。次期特別展示の開催まで展示を続ける予定である。これらの展示には、重城のり子氏ほか9名の撮影者の協力を得た。

2. 講演会など

A. 市民講座・親子教室

博物館6階の生涯学習室にて市民講座と親子教室を実施した。市民講座は平成27年6月27日と28日に「蚊の生態を知る講演会」、8月2日と9月5日に「蚊やダニから身を守ろう」と題し、それぞれ午前と午後の各1回ずつ、計7回開催した。特別展示の監修を依頼した嘉糠洋陸教授を講師に迎え、蚊と感染症にまつわる話題を一般向けにお話いただいた。親子教室は「血を吸うムシってどんなムシ？」と題して、8月1日と9月6日の午前と午後に1回ずつ、計4回行われた。東京慈恵会医科大学熱帯医学講座の先生方を講師に招き、わかりやすい実験や観察を通じて、親子で楽しく吸血動物の生態を学ぶ内容であった。

当法人が単年度に実施したイベント回数としては計11回と多く、各回10～15名が参加した。参加者総数は市民講座90名・親子教室39名で、計129名であった。

B. 講演依頼の受け入れ

職員による講演の依頼があった場合には、可能な範囲で受け入れている。講演により寄生虫学に対する関心や理解が深まることが期待される。当年度実施された主な講演を以下に挙げる。

平成27年10月 8日	足利赤十字病院「寄生虫病—過去・現在・未来」(小川和夫)
平成27年10月31日	日本臨床微生物学会「寄生虫症感染セミナー」(巖城 隆)
平成28年 2月 9日	東京農工大学科学博物館・企画展(「感染症と闘え！研究最前線」 「寄生虫って面白い！」)(巖城 隆)
平成28年 3月 1日	日本獣医師会「獣医講習衛生講習会」(巖城 隆)

3. 博物館学芸員実習生の受け入れ

当法人の運営する博物館は博物館法第2条に定義される登録博物館である。そこで、博物館法施行規則第2条に基づき、博物館学芸員資格取得のための実習生を例年受け入れている。当初12日間と計画していた実習日数は6日に改め、展示物製作や標本管理を中心とした実習内容を構成した。他にも、職員とのディスカッションを通じて展示の改善案を検討するなど、実践的な実習を目指した。寄生虫学への興味はもとより、座学だけでは伝わらない博物館運営の実情についての理解がより深まったものとする。当年度は以下の12大学、計14名を受け入れた。

立教大学 駒沢大学 立正大学 国士舘大学 東京工芸大学 琉球大学 東京農業大学
多摩美術大学 筑波大学 青山学院大学 帝京大学 東京大学（受入順）

Ⅲ. 寄生虫学への理解を深める資料の刊行・製作事業

1. 刊行物の製作と頒布

広報誌「むしはむしでもはらのむし通信」は平成27年12月26日に第195号(B5版 カラー16ページ)を刊行した。巻頭の読み物は前述の嘉糠洋陸教授執筆による「蚊と病気のお話～身近なバンパイア～」を掲載した。読み物の他に、特別展示・イベントの実施記録や展示更新状況の周知も兼ねた刊行物である。発行部数600部のうち当年度も約150部を関係機関・博物館等に配布した。来館者には約50部を年度中に販売し、残部は次年度以降も引き続き頒布する。一方、平成25年度に刊行した193号は期中に完売となった。在庫がある191号以降のバックナンバーを含めた頒布数は約430部で、昨年度より90部増加した。

また、展示ガイドブック和文版/英文版(B5版 カラー16ページ)は、展示更新に合わせて夏季に改訂版を発行した。年間販売数は1,163部で、そのうち243部が英文版であった。販売冊数は来館者数に比例して減少したが、英文版の頒布数が昨年度とほぼ同数であることは興味深い。外国人来館者の割合が増加したことが示唆される。

2. 教育用標本の頒布

昭和50年代に日本寄生虫学会からの委託により発足した「教育標本サプライセンター」を前身として、医学系の大学や教育機関等を対象に寄生虫標本を頒布している。これらは講義や実習を通じて多くの学生たちに利用されている。平成27年度は36機関から計43件の依頼を受けた。販売総数は、寄生虫卵液浸標本197本、スライド標本(切片標本・塗抹標本)274枚であった。その一方で切片標本は期中に在庫がなくなり、虫卵液浸標本も販売を中止した種類が複数種ある。今後の在庫の充実を図るため、関連学会に呼びかけ、提供可能な標本の有無などに関するアンケートを実施し、集約を行っている。日本寄生虫学会を中心としたネットワークを構築し、今後も標本在庫の確保に努める。

Ⅳ. 目黒寄生虫館ミュージアムショップの運営事業

展示室2階に併設されたミュージアムショップにおいて、前項の刊行物の販売、ならびに寄生虫学関連書籍やオリジナルグッズの委託販売を継続した。現在のアイテム数は約20種類で、販売数は年間10,000点を超える。特別展示に合わせてハマダラカの封入ストラップを限定製作したところ評判がよく、特別展示期間中に完売した。また、平成25年度に限定製作されたミヤイリガイの封入ストラップは、当年度からフォルムをリニューアルして通常販売を始めた。これら実物の寄生虫や宿主の貝に興味を抱いてもらうことは、寄生虫学を身近に感じるきっかけともなっている。

13冊を展開する書籍類は新刊、改版、絶版による完売が各1種類ずつあった。書籍の年間販売冊数は合計で約750冊であり、そのうち約660冊は当法人が監修・画像提供などで関与したものである。博物館の見学後、書籍による学習を通じて得られた知識はさらに持続される。生涯学習活動としての効果も多いに期待される。

ミュージアムショップが「博物館の、もうひとつの展示室」と呼ばれるようになって久しい。スペースも人材も限られている中、「寄生虫学の理解をより深める」という視点から、学芸員や研究者としての知見を反映できる新商品の検討を今後も進めていきたい。

その他実施事項等

I. 理事会・評議員会等の開催

1. 平成27年度第1回定時理事会開催

開催日時 平成27年6月7日(日) 午後1時～2時

開催場所 目黒寄生虫館6階 生涯学習室

出席理事数 7名(総数7名) 出席監事数 2名(総数2名)

報告事項 理事長・常務理事による職務の執行状況の報告

下案を審議し、可決承認した。

第1号議案 平成26年度事業報告書案の承認の件

第2号議案 平成26年度収支決算書案の承認の件

第3号議案 内閣府への定期提出書類の承認の件

第4号議案 定時評議員会の日時及び目的である事項等の件

2. 平成27年度第1回定時評議員会開催

開催日時 平成27年6月21日(日) 午後1時～2時

開催場所 目黒寄生虫館6階 生涯学習室

出席評議員数 6名(総数8名)

他 出席役員 5名(理事長・常務理事2名・監事2名)

報告事項 平成27年度第1回定時理事会の開催報告

下案を審議し、可決承認した。

第1号議案 平成26年度事業報告書案の承認の件

第2号議案 平成26年度収支決算書案の承認の件

3. 平成27年度第1回臨時理事会開催

開催日時 平成28年1月17日(日) 午後2時～3時

開催場所 目黒寄生虫館6階 生涯学習室

出席理事数 6名(総数7名) 出席監事数 2名(総数2名)

下案を審議し、可決承認した。

第1号議案 平成27年度補正収支予算書案の件

第2号議案 博物館規程の改正の件

4. 平成27年度第2回定時理事会開催

開催日時 平成28年3月27日(日) 午後1時～2時

開催場所 目黒寄生虫館3階事務室

出席理事数 6名(総数7名) 出席監事数 2名(総数2名)

報告事項 理事長・常務理事による職務の執行状況の報告

下案を審議し、可決承認した。

第1号議案 公益財団法人目黒寄生虫館平成28年度事業計画書及び収支予算書の承認の件

II. 省庁および自治体等への届出事項、他

平成27年

4月 8日	「国と特に密接な関係がある公益法人への該当性について」報告書	内閣官房内閣人事局
5月28日	法人税申告書	目黒税務署
6月24日	平成26年度事業報告書・収支決算書等の届出書	内閣府
7月 3日	消費税課税事業者届出	目黒税務署
8月18日	平成27年度「砂場の寄生虫卵調査」中間報告書	目黒区教育委員会
9月10日	「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に基づく履行状況調査	文部科学省(研究公正推進室)
9月18日	体制整備等自己評価チェックリスト	文部科学省

平成28年

3月 4日	休日労働・時間外労働に関する協定書	品川労働基準監督署
3月28日	平成28年度事業計画書および収支予算書の届出	内閣府
3月31日	平成27年度「砂場の寄生虫卵調査」成績報告書	目黒区教育委員会
その他、各種調査書類等への回答		内閣府等

III. その他の事項

1. 公式ウェブサイト(<http://www.kiseichu.org/>)では法人の事業内容の紹介や博物館の開館案内等を行っている。定款・登記事項に明記される公告の場として、更新を怠らぬよう情報公開に努めている。期中に改正承認された補正予算書案など公表すべき資料についてはその都度 PDF ファイルを作成し、更新した。なお、一日あたりの平均訪問者数は487名であった。
2. 博物館に隣接する自動販売機について、雑収入を計上した。
3. 平成27年度補正収支予算書内の「設備投資の見込み」で可決承認されたエレベーターのリニューアル工事を行った。

附属明細書

平成27年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条第3項に規定する附属明細書「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成しない。